

世界遺産登録が地域社会に及ぼす影響に関する事例研究

木下征彦（日本大学）

Keyword：世界遺産、コミュニティ、共同性、公共性、富岡製糸場

【問題の背景と研究の目的】

2014年6月、「富岡製糸場と絹産業遺産群」が国内18番目の世界遺産に登録された。地域社会の内外に及んだその影響として、もっとも顕著なものは富岡製糸場の入場者、すなわち観光客の急増であった。しかし、登録年となった2014年度のおよそ133万人をピークに観光客数は毎年漸減し、直近2018年度はおよそ52万人に激減している(図1)。

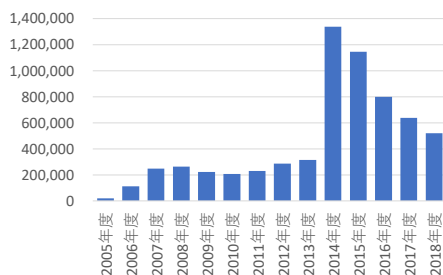


図1 富岡製糸場入場者数の推移

(富岡市提供データより作成)

観光客の増減は、あたかも世界遺産による地域活性化の指標のように注目を集める。実際、富岡製糸場の観光客数の減少も、しばしばメディア等で問題提起や議論の材料として扱われる。

とはいえ、そもそも世界遺産は観光振興のための制度ではない。世界遺産登録が観光振興・地域振興を絡めた言説は少なくないが、前者と後者の関連は科学的に十分な説明がなされているとはいえない。世界遺産登録と地域・観光振興の関連性は十分な研究がなされておらず、イメージと期待が科学的知見に先行している。

また、木下(2016・2017)が指摘するように富岡市はこれまで観光地であったこともあろうとしたこともない。富岡製糸場の世界遺産登録によって地域内外から向けられるまなざしによって変化が生じているが、それは観光面にとどまるものではない。世界遺産登録によって富岡の地域社会にどのような変化が生じているのか、十分な検証は進んでいない。

そこで、本報告では富岡製糸場の世界遺産登録を事例として、地域内外からのまなざしを手がかりに、世界遺産登録が地域社会に及ぼす影響について検討する。とりわけ、富岡製糸場に対する地域内外のまなざしに焦点をあて、世

界遺産登録によるコミュニティ意識への影響に迫る。

【研究の方法】

(1) 先行研究の整理

世界遺産と地域社会の関係を取り扱った先行研究については、木下(2017)で整理したように「世界遺産を積極的に活用した観光まちづくりを志向する立場」と「地域社会における世界遺産の意味とそれがもたらした現実に向き合う立場」の2つのアプローチがみられる。

観光振興にとどまらないより包括的な世界遺産登録の影響を捉える本報告との関係で整理すると、世界遺産をめぐる地域内外のさまざまな「まなざし」を分析した黒田(2007)の問題関心とアプローチを本報告は継承している。また、小室(2014)では、国内2事例の分析を通じて、観光客の減少に対する戦略的な観光振興策の必要性を指摘している。さらに、澤村(2015)では国内10事例の登録前後10年間の観光動向の推移を分析し、有意に変化したのは2事例にとどまることを析出。その上で、単なる観光客の増加を目的として世界遺産登録運動の妥当性に疑義を呈している。

こうした先行研究が示すように、ほとんどの世界遺産登録事例において観光客数はピーク時から減少を余儀なくされている。冒頭に示した富岡製糸場の観光をめぐる状況もこうした傾向と軌を一にしている。したがって、世界遺産登録の地域社会への影響を捉えるためには、より多角的な視点の検討が必要である。そこで、本研究においては先行研究や既存データを示しつつ、世界遺産登録が地域社会に及ぼす影響を捉える多角的な視角として行政施策や商工業、市民活動等に言及しながら、コミュニティ意識への影響に焦点をあてる。

(2) 研究の方法と用いるデータ

富岡市という地域社会におけるコミュニティ意識を検討するにあたり、本報告では富岡製糸場に対する地域内外のまなざしを分析する。市民が富岡製糸場に対して抱く意識、地域外から訪れた観光客が富岡製糸場と富岡のまちに対して抱く意識の双方を分析し、将来的にそれらの地域内外の相互作用がもたらす地域社会への影響を分

析する一助とする。主に報告者自身が高崎商科大学で2014年の世界遺産登録直後に行った市民意識調査（商大調査）を中心に検討する¹。さらに、2014年から報告者が6年に渡って続けてきた聞き取り調査の成果を逐次用いる。また、地域外部から向けられる観光のまなざしを捉えるため、報告者が高崎商科大学と日本大学で行った富岡製糸場を訪問した観光客に対する調査データを適宜用いる。

まず、世界遺産登録の影響として地域内のまなざしを分析する視角として、商大調査の予備的検討において発見した市民の富岡製糸場への意識に注目する。商大調査では、「問5 あなたは富岡製糸場についてどのようにお考えですか」という択一式の設問に対して、図2のような回答の傾向が示されている。

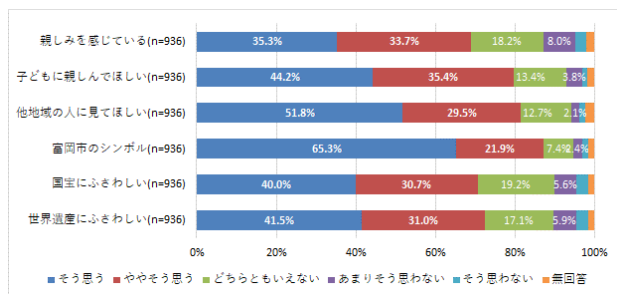


図2 富岡製糸場に対する意識

「そう思う」と「ややそう思う」の合成指標（思う）をみると、「富岡市のシンボル」（87.2%）、「他の地域の人に見てほしい」（81.3%）、「子どもに親しんでほしい」（79.6%）、世界遺産にふさわしい（72.5%）、「国宝にふさわしい」（70.7%）、「親しみを感じている」（69%）の順となっている。この6つの変数について回答者の階層クラスタ分析を行ったところ、①「国宝にふさわしい」と「世界遺産にふさわしい」、②「子どもに親しんでほしい」と「他地域の人に見てほしい」と「富岡市のシンボル」という類似性のある2つのグループがみられた。理論的に枠づけるならば、①は世界遺産の普遍的な価値や公共性に関わる側面であり、②は地域の歴史・文化に固有の価値や共同性に関わる側面と考えられる。そこで、世界遺産登録が富岡製糸場という地域の歴史的・文化的遺産に対するこれらの共同性と公共性という2つの視点から富岡製糸場に対する地域内のまなざしを検討する。また、富岡の外部からのまなざしについては、木下（2017）の分析結果から得られた知見を継承する。

【研究・調査・分析結果】

(1) 富岡製糸場へのまなざし：登録以前

官営模範工場として1872(明治5)年に設置された富岡製糸場は、民間払い下げ後、私企業の工場となり、2度のオーナー変更を経て、1987年に「片倉工業富岡工場」として操業を停止した。

聞き取り調査によれば、製糸場付近の中心市街地の住民たちは、閉鎖以前は「富岡製糸場」ではなく「片倉」と呼んでおり、ごく身近な日常の一部であった。それゆえ、閉鎖前の片倉工業富岡工場を知る世代の中心市街地の住民たちは製糸場に親しみを感じる一方で、身近すぎてその「すごさ」や価値を実感しにくいという。他方、中心市街地から離れた地域に住む市民にとって、富岡製糸場は郷土史や身近であった養蚕業との関連で常識として知っていても、直接関わる機会は少なかった。さらに、1987年の工場閉鎖後に育った世代にとっては、2005年に市民の見学が開放されるまで、中心市街地の住民でも製糸場に親しむ機会は限られていた。そうした側面からみると、富岡製糸場は一部地域・世代の人々にとっての共同性の紐帯ではあっても、富岡市という地域の幅広い世代と異なる居住地の人々にとって共通の愛着や帰属の対象として認識される余地は少なかったと考えられる。

しかしながら、2003年に開始した世界遺産登録推進運動は、市民が製糸場の「すごさ」や価値を実感する機会となった。また世界遺産登録後は、木下（2016）が詳細に記述・整理しているとおおり、富岡製糸場の世界遺産登録は多方面にわたって地域に影響している。まず、行政施策においては総合計画の基本理念に「世界遺産にふさわしいまち とみおか」が掲げられ、都市計画や産業育成などの施策に反映されている。実際、商工会や市民活動団体などのアソシエーションの活動も富岡製糸場をキーワードに多様な活動が展開した。

また、冒頭に述べた通り、登録前後から多数の観光客が富岡製糸場に訪れ、それに呼応して中心市街地に賑わいが生じた。特に、2014年から2015年にかけては富岡製糸場周辺に多数の商業店舗が出店し、富岡製糸場の名を冠した多数の商品も発表された。行政施策によって富岡の養蚕業やシルクブランドへの注力がなされるなど、地域社会において世界遺産「富岡製糸場と絹産業遺産群」の物語が共有されることとなった。

(2) 富岡製糸場に対する地域内のまなざし

先述の通り、世界遺産登録以前の富岡製糸場は、地域

の幅広い世代と異なる居住地の人々にとって共通の愛着や帰属の対象として認識されていたとはいえない。

しかしながら、世界遺産登録がなされた2014年の商大調査を分析することで、世界遺産登録後の新たな傾向をいくつか見いだすことができる。

上述の問5から、製糸場への愛着を測る「製糸場に親しみを感じている」の年齢別・居住地域別のクロス集計を示す(図3・図4)。続いて、世界遺産の普遍的な価値や公共性に関わるグループ①から「世界遺産にふさわしい」の年齢別・居住地域別のクロス集計を(図5・図6)、地域の歴史・文化に固有の価値や共同性に関わるグループ②から「親しみを感じている」の年齢別・居住地域別のクロス集計をそれぞれ示す(図5・図6)。

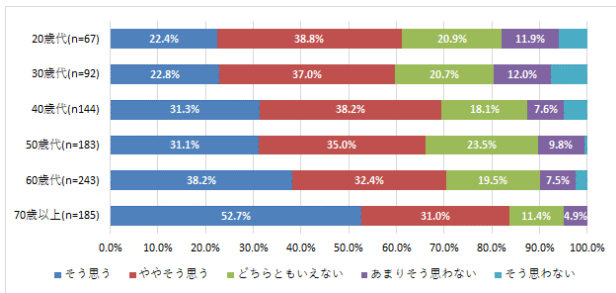


図3 クロス表 (年齢×製糸場に親しみを感じている)

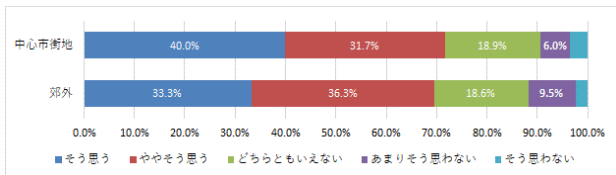


図4 クロス表 (地域別×製糸場について:親しみを感じている)

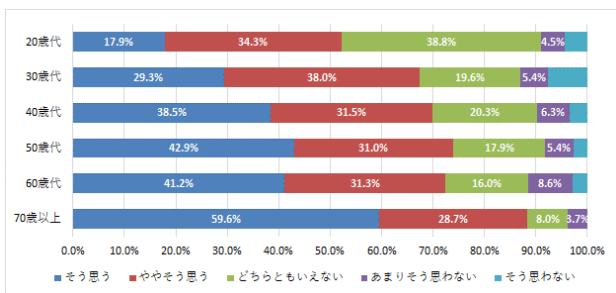


図5 クロス表 (年齢×製糸場は世界遺産にふさわしい)

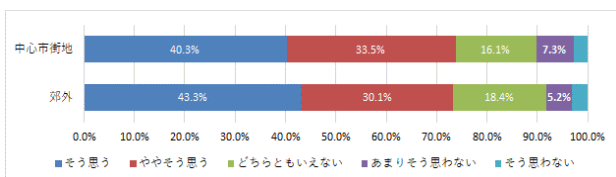


図6 クロス表 (地域別×製糸場は世界遺産にふさわしい)

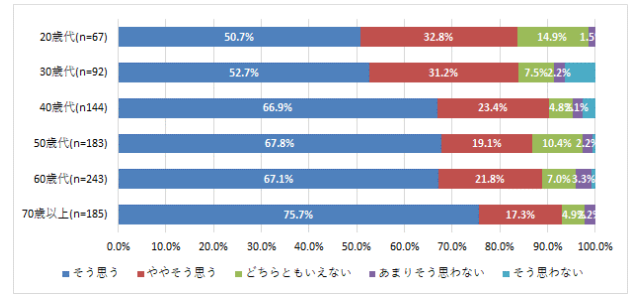


図7 クロス表 (年齢×製糸場は富岡市のシンボル)

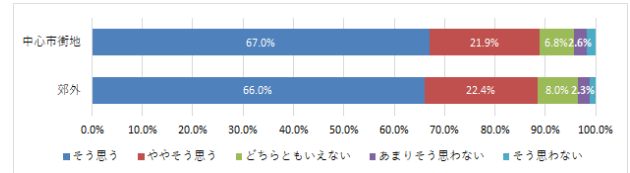


図8 クロス表 (地域別×製糸場は富岡市のシンボル)

それぞれの表について、年齢別のクロス集計をみると、いずれの項目においても年齢が高いほど「そう思う」と「ややそう思う」の合成指標(思う)の割合が高い。一方、製糸場がある中心市街地と郊外の地域別のクロス集計では全体的にみて傾向の違いは見られない。

(3) 富岡に対する地域外のまなざし

木下(2017)が指摘するように、富岡製糸場を訪れる観光客は、〈世界遺産のまち・富岡〉に対して富岡製糸場をはじめとする歴史的・文化的な側面と、非日常空間としての観光地としての側面の双方を捉えていた。この点は、2018年に日本大学で実施した観光客調査「〈世界遺産のまち・富岡〉へのまなざしに関する調査」の結果から新たな示唆を得られるⁱⁱ。具体的には、観光客を「個人」と「団体」に区分して、それぞれ滞在時間と総合満足度を比較すると、傾向の違いが示された。

	個人		団体		全体	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
1時間未満	3	1.8%	7	3.9%	10	2.9%
1時間以上2時間未満	40	23.8%	94	51.9%	134	38.4%
2時間以上3時間未満	68	40.5%	49	27.1%	117	33.5%
3時間以上4時間未満	40	23.8%	18	9.9%	58	16.6%
4時間以上5時間未満	13	7.7%	6	3.3%	19	5.4%
5時間以上	4	2.4%	5	2.8%	9	2.6%
無回答	0	0.0%	2	1.1%	2	0.6%
合計	168	100%	181	100%	349	100%

表1 滞在時間のクロス集計【滞在時間×個人・団体】

	個人		団体		全体	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
5 満足	54	32.1%	41	22.7%	95	27.2%
4	71	42.3%	76	42.0%	147	42.1%
3	41	24.4%	52	28.7%	93	26.6%
2	2	1.2%	6	3.3%	8	2.3%
1 不満足	0	0.0%	3	1.7%	3	0.9%
無回答	0	0.0%	3	1.7%	3	0.9%
合計	168	100%	181	100%	349	100%

表2 総合満足度のクロス集計【総合満足度×個人・団体】

これはいわば、地域に固有の歴史・文化を求める人々と非日常空間としての観光地を求める人々が別であることを示唆している。これらのことから〈世界遺産のまち・富岡〉に向けられる外からのまなざしは、それを一律に捉えるのではなく、どのような動機や目的で富岡を訪れた誰のものかを掘り下げる必要が確認された。

【考察・今後の展開】

富岡製糸場に対する地域内外のまなざしに焦点をあて、世界遺産登録によるコミュニティ意識への影響を分析した結果、以下のことが分かった。

商大調査では、製糸場との関係や意識について世代による差異が示唆された。富岡製糸場への意識は、年齢が高いほど肯定的である。これはまちなかで製糸場が稼働していた時代を経験し、いわば製糸場をコミュニティの共同性の紐帯と捉えている世代とそうでない世代の相違といえる。一方で、製糸場を「富岡市のシンボル」と捉える傾向は、親しみを感じない若い世代にも共有されている。世界遺産登録によって富岡製糸場は世界的に「顕著な普遍的な価値」を認められ、いわば公共性を帯びたものとして地域外部の人々に認知され、注目されることとなった。そのことが、20代・30代の意識に関連していることを示唆している。この点は、今後の富岡のまちづくりを考える上で非常に重要である。ただし、登録前後で製糸場への意識について、具体的にどのような変化が生じたかどうか、それがどのような要因によるものかは、今後、精緻な分析を行う必要がある。

また、観光客を対象とした調査によって〈世界遺産のまち・富岡〉を捉える地域外のまなざしが、観光客の属性によって異なることが示唆された。

これらをさらに掘り下げ、地域の外からのまなざしが地域社会のコミュニティ意識にどのように作用したのかの要因連関を明らかにするが必要である。そのためには継続的な調査による分析が欠かせない。なお、報告者は本年度中に商大調査を継承・発展させた市民意識調査を実施する予定である。

今後、こうした地域内外の再帰的な関係性を捉え、地域内部で歴史的・文化的に育まれた共同性と、世界遺産という地域の外部からもたらされた公共性の概念を理論的に整理し、地域社会とそのコミュニティの変容を捉えるモデルを確立していく。

【引用・参考文献】

- 木下征彦, 2016, 「富岡地域における観光まちづくりの現状と展望」『高崎商科大学コミュニティ・パートナーシップ・センター紀要』2, 85-101.
- 木下征彦編, 2018, 『高崎商科大学「地(知)の拠点」整備事業 地域課題研究プロジェクト/地域資源研究プロジェクト 富岡地域研究報告書』高崎商科大学コミュニティ・パートナーシップ・センター.
- 木下征彦, 2017, 「『世界遺産のまち』に向けられる観光のまなざし」『地域活性学会研究大会論文集』9, 62-65.
- 木下征彦, 2018, 「世界遺産とコミュニティに関する一考察——富岡製糸場を事例として」『公共研究』14(1), 149-176.
- 小室充弘, 2014, 「世界遺産を活用した観光振興のあり方に関する研究」『運輸政策研究』17(2), 70-74.
- 黒田乃生, 2007, 『世界遺産白川郷——視線の先にあるもの』筑波大学出版会.
- 毛利和雄, 2011, 『改訂版 世界遺産と地域再生——問われるまちづくり』神泉社.
- 森谷健, 2005, 「旧官営富岡製糸場の世界遺産登録とまちづくりに関する富岡市民意識調査(報告)」『養蚕・製糸・織物などの歴史遺産を生かした「シルクカントリー群馬」の地域再生構想調査報告書』, 25-37.
- 澤村明, 2015, 「世界遺産登録と観光動向(修正加筆稿)——日本の10事例から」『新潟大学経済論集』100, 117-128.

謝辞

本研究で用いたデータの内、2014年の市民意識調査と2014年および2015年の観光客調査は高崎商科大学コミュニティ・パートナーシップ・センターが文部科学省「地(知)の拠点」整備事業補助金によって実施したものである。また、2017年度に日本大学で実施した観光客調査は、日本学術振興会 科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)平成30年度基盤研究(C)「世界遺産登録が地域社会に及ぼす影響に関する事例研究——まなざしと再帰性から」(研究代表者:木下征彦)の一環として実施したものである。

i 商大調査の概要は下記の通り。

実施主体: 高崎商科大学コミュニティ・パートナーシップ・センター
調査期間: 2014年11月30日～12月15日
母集団: 富岡市民成人男女42,175名
標本数: 2,000
回収数: 936件(回収率46.8%)
抽出方法: 住民基本台帳から無作為抽出
調査方法: 郵送法

ii 実施主体: 日本大学商学部木下征彦研究室
調査期間: 2018年11月17日(土)～18日(日)
調査方法: 富岡製糸場来場者を対象とした街頭面接法
調査地点: 富岡市内4地点(いずれも)
回収票: 366(内有効349)